

【資料紹介】

丹後出土文字資料の新知見

資料課 松尾史子

1. はじめに

本稿では、令和6年度に行った丹波・丹後地域出土の木簡・墨書土器等文字資料の調査において、新たに明らかになった見解を紹介する。

調査は独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の山本崇氏が代表で実施している科学研究費補助金基盤研究C「丹波丹後地域出土文字資料の悉皆再釈読による古代山陰道の歴史的地域的特質の解明」に伴うものである。

令和6年4月11日および7月18日に当館研修室において当館保管の文字資料計6点について悉皆熟覧およびデジタル撮影(カラー・赤外)、再釈読を行った。

調査の結果、堤谷瓦窯出土資料と大田鼻28号横穴出土資料において各1点、新たな知見を得る



写真1 調査の様子



写真2 撮影の様子

ことができたので、以下その概要を紹介する。

2. 資料の概要

(1) 堤谷瓦窯出土資料(写真3、図1)

堤谷瓦窯跡群は、京丹後市北西部の久美浜町に所在する丹後半島における最古の須恵器製作工房の一つである。1991年の発掘調査で7世紀前半の窯跡2基と8世紀前半の窯跡1基、これらに伴う灰原が確認された。8世紀前半には瓦も焼成している。

本資料は灰原から出土した8世紀前半の須恵器



写真3 堤谷瓦窯出土刻書土器

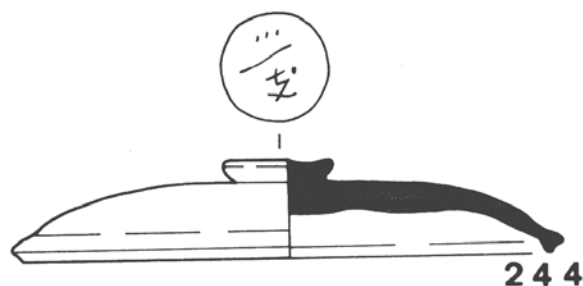


図1 堤谷瓦窯出土刻書土器実測図

杯蓋で、焼成前につまみの頂部に文字が線刻されている。1993年刊行の概要報告書で図示されているが(第76図244)釈読はなされていなかった。

今回の調査において、線刻された文字「ツ支」の「ツ」は川のくずし字で「つ」と読め、万葉仮名で「つき」＝「杯」と書かれていると解釈できるのではないかと結論に至った。「ツ」については点の数が多いが、文字の習熟度によるものと捉えることができるのではないかと考える。

(2) 大田鼻28号横穴出土資料(写真4、図2)

大田鼻横穴群は、京丹後市大宮町に所在する飛鳥時代から奈良時代の30基からなる横穴群である。1985・1986年に発掘調査が実施され、28号横穴から3点の墨書土器が出土している。墨書土器はいずれも8世紀中頃の赤色塗彩された土師器(丹塗土師器)で、横穴玄室内から出土した。3点のうち1点は杯蓋(30)で、天井部外面に「厨」・「厨人」の墨書が確認できる。残り2点は高杯で、1点(29)は杯部外面に「厨物」の墨書があり、もう1点(28)は墨痕は認められるものの釈読はで

きていなかった。

今回の調査で赤外線撮影をしたところ、報告書作成段階で釈読できていなかった墨痕が「厨物」であることが明らかになった。

3. おわりに

今回の悉皆熟覧調査において、新たに釈読することができた文字資料があったことは大きな成果であった。現時点で丹後出土の文字資料には明らかに万葉仮名で書かれたものは確認されていない。堤谷瓦窯出土刻書土器は土器焼成前に書かれたものであり、当時の丹後において須恵器工人にまで万葉仮名が普及していたのか興味深いところである。

参考文献

- (1) 京都府教育委員会「丹後国営農地開発事業関係遺跡平成4年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』1993 91頁
- (2) 京都府教育委員会「丹後国営農地開発事業関係遺跡昭和62年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』1987 77頁
- (3) 京丹後市『京丹後市史資料編 京丹後市の考古資料』307-315頁

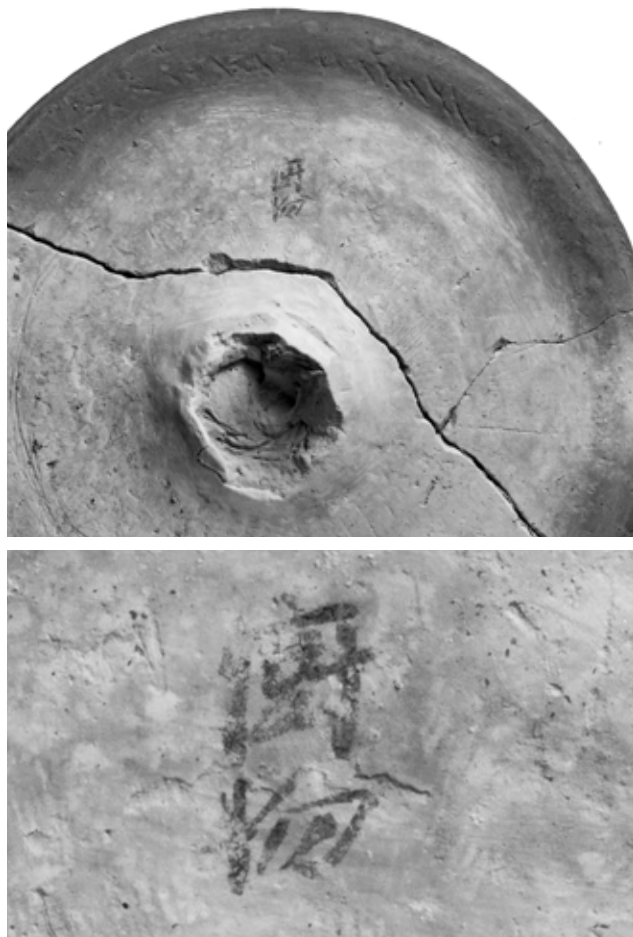


写真4 大田鼻28号横穴出土墨書土器（赤外線撮影）

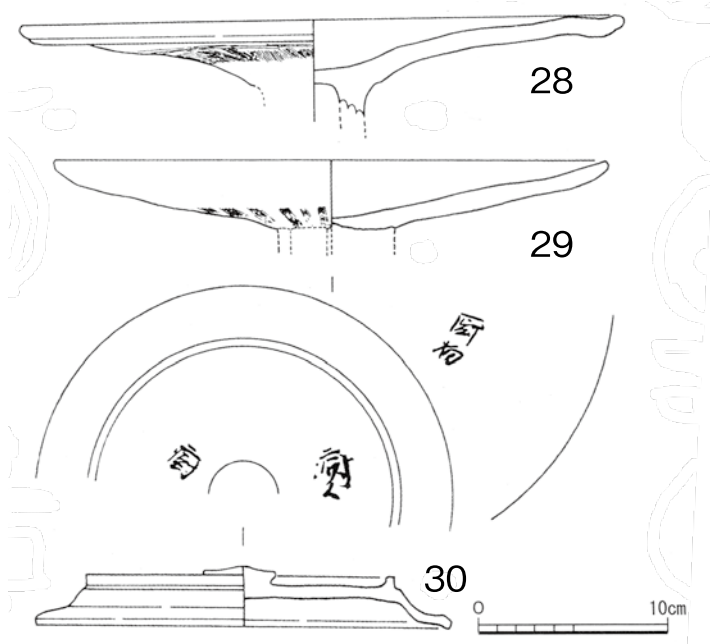


図2 大田鼻28号横穴出土墨書土器実測図